

第 19 回 優秀賞(銀賞)受賞作品

# 「悲哀のひまわり」

山口県 梅光学院高等学校三年 岡本 沙慧可



賢治のまちから  
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀賞〉

『悲哀のひまわり』

山口県 梅光学院高等学校三年 岡本 沙慧可<sup>さえか</sup>

夏休みの水やり当番で学校に来ていた私は花壇に咲くひまわり達の中で飛びぬけて背が高く、鮮やかな赤色を黄色い花びらの生え際から中心部あたりまで滲ませた一輪に目を奪われていました。

綺麗だから……ではなく。

周りのひまわり達はほとんど同じ姿形をしているにも関わらず、このひまわりは空気を読まず一人だけ頭が抜きん出っていて、一人だけ花びらをきらびやかな赤で飾っているのです。一番前のだ真ん中に根を生やしていることも、他のひまわり達と隔<sup>へだ</sup>たりがあるように見えます。

なんとというか……心にくる惨<sup>みじ</sup>めさをこのひまわりは放っているのです。ひまわりは明るく、元気なものといったイメージがありますが、このひまわりからはそういった要素が抜け落ちているように感じました。

私は、学校内での使用を表向きでは固く禁じられているスマホに電源を入れて「おっけーぐーぐる！ ひまわり、花言葉、赤!!」とマイクに向かって命令を出します。

普段なら恥ずかしくてできないことですが幸い時は夏休みです。

水やりのためにここへ来た私以外で、校内に設置された中庭などに足を運び入れるような趣<sup>おもむき</sup>のある奴など、この学校にはいません。スマホを使用して怒られることもない、存分に大声を出せる環境に少々胸が躍りました。

「悲哀」<sup>ひあい</sup>

検索結果で出てきた一番上のサイトをタップして、私は小説でしか目にした事のない単語と出会います。そして、同じサイトでひまわり自体の花言葉が「憧れ」「あなたただけを見つめる」だということを知りました。



## 賢治のまちから 高校生☆生活大賞

私はこの三つの単語を頭の中で咀嚼そしゃくしていきます。すると、ポコッといった勢いで『失恋』の二文字が浮かび上がったのです。

「ははーん。さてはあなたフラれたわね」

私は悪女を気取って彼女の茎をツンとつついてやりました。

何もしなくていいはずの夏休み中に、水やり当番のせいで学校に来なければいけなかったことが少々不満でした。良い鬱憤うっぷんばらし見つけたり……と思つての行動だったのです。

つつかれたひまわりは二度、そのずうたいを揺らすばかり……。当たり前ですが反論の声など上げはしません。

私は胸が軽くなるのを感じ、なんだか楽しくなって、悪女の演技に拍車をかけます。

「まあ、でも、似合ってるんじゃないかしら？ えっと……そう！ あなたには孤独がお似合いよ！」

ビシッと人差し指をひまわりに向け、私は精一杯格好つけてやりました。そう、ひまわりにです。

どこからか飛んできたカラスが「かあ」と一声鳴いて去って行きました。私は突然の侵入者のせいで現実の世界に引き戻されます。

カラスは賢い生き物です。植物なんかを挑発している私を、鳴いて侮辱ぶじやくしたのでしよう。自分の行いの恥ずかしさに、顔が赤くなっていくのを感じます。

しかし、どうにも見栄みえっ張りばをやめられず「せめて髪型かみかたでも変えることね！」と、ひまわりには痛くも痒かゆくもないであろう捨て台詞ぜりふを吐いて、私は足早にこの場を去りました。

次の日。

私はまたしても花壇の前にいました。

今日当番の友達が、熱を出してしまい代わりを頼まれたのです。はあ。

私はため息をひとつこぼします。



また学校に行かなければならなかったためでもあります。それだけではないのです。

昨日私がはじめた赤じみ付きのひまわりが隣に鎮座する別のひまわりさんの茎（腰？）に自分の葉っぱ（手？）をまわしているのを発見してしまったのです。

若者言葉で言うところの『リア充』の挿絵にでもされそうな恰好を見せてつけられ、私はどんよりと気が沈んでしまいました。

このひまわり、私が言ったことを真に受けてしまったようです。

「ひまわりさん、赤じみひまわりさん」

私は呆れ半分で声をかけました。

「あなたって本当に悲しい人なのね」

言ってから（あら、ひまわりに『人』だなんて言ってしまった）と少し後悔しつつ、相手の反応を伺います。

悲しい人……そうなのです。

たしかに赤じみひまわりは隣のひまわりさんの腰に手を回し、相手の顔に寄り添っていました。一見、それは「相思相愛」というに足りる光景ですが、よく見てみると腰に手をまわされているひまわりさんは太陽に顔が釘付けで、赤じみひまわりのことなど気にも止めていない風なのです。

「独りよがりのようにしか見えないわ！ あなたがパートナーに選んだ相手は偉大なる太陽に首ったけだったのに……。あなた達、本当に付き合っているのかしら？」

意地の悪い継母のごとく口元に手を置き、薄ら笑いを浮かべて見せました。

ひまわりに、です。

植物の分際で……というよりも単純に、うら若き女子高生である私の先を越して異性にベツタリと甘えていることが、気に食わなかったのです。

そして、ほんの少しではありますが、自分より背の低いひまわりさんに寄り添うために頭を下に向けた赤じみひまわりの心情を思い苛立ちもしていました。

ほんの少しではありますが。



「……ふん！」

昨日のようにだんまりを決め込む赤じみひまわりを鼻で笑い、私はジョウロに溜めた水を花壇中にまんべんなく撒きました。そしてもう一度水を汲み、太陽にメロメロひまわりさんにたっぷり水をかけ直します。

赤じみひまわりに拘束されてカワイソウだから慈悲をかけた……ではありません。

「赤じみひまわり、あなたの花びらは今も赤いわ。さっさと、そいつから手を離れたほうがいいんじゃない？」

誰よりも早く枯れるように、土を抉りつつ過剰な栄養を与えてやったのです。

すぐに感情的になってしまうことが私の悪い所なのですが、今回もどうやらやり過ぎてしまったようでした。オノマトペで言うならば『グジャダン』になってしまった穴のあいた地面を再度見て、ため息が漏れます。

私は少し落ち着こうと朝の澄んだ空に目をやりました。しかし、そんなことをして思い出すのは昨日の憎たらしいカラス。

静まりかけていた心に怒りと羞恥の入り混じった感情が蘇ってききました。

「……もう帰るわ！」

お嬢様気取りでフイツと身を翻し、ジョウロをそっと置いて場を後にします。

もちろん、赤じみひまわりの視界に入る範囲までは、モデル歩きをすることも忘れませんでした。

その日の晩、私は友達にラインでメッセージを送りました。

『明日とうばーん？ ひまわりの写真、ま正面から撮って送ってちょ！』

愛らしいひまわり達の姿が見たいから……ではなく、例のごとく赤じみひまわりが次にどんな行動をとるのか知りたかったのです。

もしかするとあいつは、私が明日も来ると思って試行錯誤しているのかもしれない。



一度そう考え出してしまうと、気になって気になって仕方なかったのです。

『おけ!』

友達からの端的な返事を見て、私は安堵のため息をこぼします。写真を撮ってもらいたい理由を尋ねられても、『ひまわりの行動が気になるの』などとガリ勉またはキチガイが言いそうな答えを返すわけにもいきませんから。妙な噂が広がっては、ひとたまりもありませんから。

素直な了承を貰え、ほっとしました。

「さあ、明日も赤じみひまわりは見栄を張るのかなあ」

自分で呟いてみて不思議に思いました。

どうやら私は、あのひまわりが生きていると本気で信じ込んでいるようなのです。

『ひまわり、校長に刈られてた(笑)』

次の日の夕方に届いたメッセージには、こう綴られていました。

『刈られた』ワードにどきりとして返信も返せぬまま呆然とスマホの画面を眺めていると、立て続けに学校からメールが届きます。

『生徒の皆様へ』

夏休み期間中の花壇の水やりは、一部のひまわりが枯れ始めてきたため、本日より終了といたします

慈悲も何もあつたものでない、ゴシック体で浮かび上がる『枯れ始めた』『終了』の文字に思わず私の心臓は震えました。

枯れ始めた……というのは、あの赤じみひまわりのことでしょうか？

あの赤じみひまわりは、捨てられてしまったのでしょうか？

私は急いで制服に着替え、玄関のドアに鍵をかけることも忘れて家を飛び出しました。

『己の青春のため、走れや若者』

ぜえ、はあ、と苦しくなる呼吸になんとか耐えながら学校めがけて走り続けるその途中そんな名言じみたものが頭の中に浮かび上がってきました。



# 賢治のまちから 高校生大活劇大賞

どこで聞いた、読んだ文かはわかりませんが『人は誰しも一度は、青春に溺れて走ってしまうものである』と言ったような意味が込められていたはず  
です。

私が今こうして走っている理由はこれが言うように『青春』が原因なので  
しょうか。

でも、それにしては変です。

ただか一輪のひまわりのために、学校が開いている時間に間に合うよう  
全力疾走しているなど、変なことではないでしょうか？

普通の高校生は、はてさてこんな行動に出るものだったでしょうか。

それに、もっと他に私の青春は使い道があるはずです。体育祭リレーと  
か、持久走とか……他に何も思いつきませんが、とにかくあるはずなので  
す！

「すみません!!」

幸い、私の家は学校から近いほうだったので十分程度で職員室前までたど  
り着くことができました。それでも、ひまわりのために十分間も走り続けた  
のだと思うと、悔しい気持ちに心が広がります。

「校長先生！ ひ、ひまわりは！ 刈った、あと、どうしたんですか?」

「あ、あらこんばんは。どうしたの? ……ひまわり?」

突如ドアを蹴破らん勢いで突入した私に、女校長は慌てた様子で対応して  
きました。

他の先生たちもあっけらかんと私の方を向いたまま、固まっています。

私は急激に湧き上がる恥ずかしさに耐えながら「校長先生が今日刈ったひ  
まわり達はどこにいますか?」と質問し直しました。

「ああ、それなら昇降口に置いてあるわ」

「え?」

私は、昇降口から学校に入ってきました。

つまり私は走るのに夢中になって目的であるはずのひまわりを見落として  
いたのです。

うわ、うわあ……恥ずかしい!



「……どうしたの？」

顔を真っ赤にする私に校長は、恐る恐るといった風に尋ねてきました。

「いや、そのお……あの、できれば、ひまわりを一本いただけないかと思いまして」

恥ずかしさのあまり口ごもってしまった私とは裏腹に、校長は安心した表情で「もちろんいいですよ！」と明るい声で了承してくれました。

先ほどの動揺しきっていた校長は何処<sup>どこ</sup>へやら……。

きつと、テロでも起こしそうな勢いで入ってきた女子高校生の、急に弱々しくなった姿を見て拍子抜けしたのでしよう。

彼女の表情はいつも通りの、自信に満ち溢<sup>あふ</sup>れた顔に戻っています。

これがオトナというものですか。

「あでもー、二本だけにしてもらえないかしら？ お世話になった方に送る予定だから」

校長の言葉に、私は「一本いただきます。ありがとうございます！」と言って早歩きで職員室から出て行きました。

もう先生たちには会いたくないです。

「……やっほう」

眼前の大きな青いポリバケツの中に向かって、私は声をかけます。

挨拶をした……というよりも『生存確認』をしたのです。

水が三分の一ほど溜められているポリバケツには、紐<sup>ひも</sup>でゆるく縛られたひまわり達の束と、それとは別に猫背で顔を伏せている一本の赤じみひまわりが入れられていました。

やはり、メールに載っていた『枯れ始めたひまわり』は赤じみひまわりのことを言っているようです。

……正直、太陽にメロメロひまわりさんを枯らしたのではないかと思っていたので、その点でいってはホツとしました。

「……」



他の元気なひまわり達は『お世話になった方』の元へ送られるようすが、赤じみひまわりはどうなるのでしょうか。

このまま、ポリバケツの中で一人、生涯を終えて行くのでしょうか。

『枯れ始めたひまわり』だから……。

しかし、先生は勘違いしておられます。

このひまわりは失恋し、新たな恋を实らせる事ができず、妙につっかかってくる女子高生にいじめられ悲しんでいるだけなのです。

その証拠に、赤じみひまわりのその赤く染みた花びらも、茎も葉っぱも、しっかりとその姿を保っています。

綺麗です。

私が赤じみひまわりの茎をそっと掴み上げると、彼女は力なく頭を揺らし茎の切断部から水をぼたぼたと零しました。

夕方とはいえ真夏の暑さは馬鹿にできません。このまま赤じみひまわりを運んでしまうと、本当に枯れてしまうことでしょう。

しかしながら、私もなんの考えもなしに赤じみひまわりを持って帰ろうとしているわけではありません。

職員室から退出する際に担任の机から盗んでおいたセブンのビニール袋を私はポリバケツに突っ込み、水を二百ミリリットルほど汲み上げました。あまり水を入れては、袋が破れてしまうと思えば少なめに汲んだのです。

そして私はしょぼくれている赤じみひまわりを優しく入れ、底につかないよう浮かした状態で袋ごと掴み上げました。

「君は誰にも貰われないようよ」

昨日、一昨日のように憎まれ口を叩きながら、あいた片手を赤じみひまわりの背にそっと添えます。

それは単純にバランスを保たせるためだけの行為でしたが、まるで赤ちゃんを抱きかかえるような感覚を私は覚えました。

私の中で何かがフツと落ちていきます。

成績があまりいい方でない私には『何か』とは具体的にどういうものなのか表現する事ができません。

ですが、なんだかスッキリした気分になったことは確かでした。

「だから、私が貰ってあげる」



# 賢治のまちから 高校生大活劇大賞

私は赤じみひまわりに向けて意地悪な笑みを送りました。  
いえ、今は気分が本当にいいので、不覚にも口元の緩んだ笑みを浮かべて  
いるかもしれません。

ありがとう。

「……！」

どこからか女の、凜と澄んだ声が耳に入り私は息を呑みました。

どこからか……というか、赤じみひまわりから、聞こえてきたのです。

「……あら、あなた喋れたの？」

私は今にも飛び出しそうなほどに騒ぎ立てる心臓を必死で無視して、偉そ  
うなライバル風を装い煽りかけました。しかしいくら待ってみても、赤じみ  
ひまわりが先ほどのように何か思いを声を出すことはありません。

私は促すように彼女を前後に揺らしてみますが、頭をユタユタと揺らす  
ばかりで口を開いてくれる気配はありませんでした。

「……」

仕方なく、私はひまわりと話すことを諦めて別々の場所にほっぽり出さ  
れたままだったローファアを、赤じみひまわりのバランスを上手くとりなが  
ら回収してかかとを揃えます。ローファアに片足ずつゆっくりと足を通して  
いききました。

その間も私の脳裏では、さっきの凜と澄んだ声の言葉が引つかかって、何  
度も何度も復唱していました。おかげで心臓はまだバクバクと音を立て続け  
ています。

「ありがとう？ 本心で言ってくれたの？」

私がかもう一度ひまわりの顔色を伺うと、彼女の花びらに付いた赤じみがい  
つの間にやら薄らいでいることに気が付きました。

けれどもひまわり本来が持つ普遍的な黄色に近づいたというのに、それが  
逆に私には淡泊なものに見えたのです。

私の目はすっかり彼女の赤じみに慣れきっていたので、物足りないと感じ  
たのでしょうか。

「……。先に怒るべきだったんじゃないかな……怒るべきだったよ」



# 賢治のまちから 高校生☆童話大賞

これからはうちの家の子なんだから。と私は冗談めかして、片手で赤じみひまわりの大輪をつついてやります。

それでもやっぱり、赤じみひまわりは何かを言い返してはくれません。彼女の声がもう一度聞きたいのに、聞けやしません。

ドアを背中を押して外に出ると、ムツとした蒸し暑さが首もとに絡みついてきます。

上を見上げれば、沈みかけた太陽と濃淡な紺に今にも飲み込まれそうな茜色あかねいろの肌がジワジワと下へ滑り落ちていく姿が見えました。

消えかけの夕焼けはそれでも赤じみひまわりを見事に照らし出し、鮮やかな茜色を塗りつけていきました。

その様を眺める私の視界が、徐々にぼやけていきます。涙のせいです。

体感二十一グラムの重みが消えた彼女を、そばにいるのに遠く感じて、抱きしめているのにむなしく思っ、恋しくて溢れてしまった……涙のせいなのです。